

プレスリリース

平成14年3月27日
水産庁漁場資源課
独立行政法人水産総合研究センター
西海区水産研究所

平成13年度第2回東シナ海漁況海況予報

予報対象期間：平成14年4月～14年9月

本予報は、平成14年3月26日に開催された第76回対馬暖流系アジア・サバ・イワシ長期漁況海況予報会議において別表の水産関係機関が検討した結果を、独立行政法人水産総合研究センター西海区水産研究所がとりまとめたものです。

1. 本予報は水産庁のホームページ (<http://www.jfa.maff.go.jp/>) 及び水産総合研究センターにおける我が国周辺水域資源調査等推進対策委託事業のホームページ (<http://abchan.job.affrc.go.jp/>) に掲載されます。なお、本予報については、西海区水産研究所のホームページ (<http://www.snf.affrc.go.jp>) からアクセスできます。
2. 本予報の内容等に関する問い合わせ先は、以下のとおりです。
水産庁増殖推進部漁場資源課沿岸資源班 担当：竹葉、吉岡
住所：〒100-8907 東京都千代田区霞が関 1-2-1
電話：03-3502-8111 (内線7376) ファックス：03-3592-0759
電子メール：shinnichi_yoshioka@nm.maff.go.jp
水産総合研究センター西海区水産研究所 企画連絡室
住所：〒850-0951 長崎市国分町 3-30
電話：095-822-8158 ファックス：095-821-4494
電子メール：kiren@fra.affrc.go.jp

参 加 機 関

山口県水産研究センター	鹿児島県水産試験場
福岡県水産海洋技術センター	沖縄県水産試験場
佐賀県玄海水産振興センター	(社)漁業情報サービスセンター
長崎県総合水産試験場	水産庁増殖推進部漁場資源課
熊本県水産研究センター	西海区水産研究所

平成13年度第2回東シナ海海況予報

1. 今後の見通し(2002年4月～2002年9月)

(1)海流および水系分布

・カラ海峡における黒潮北縁域の位置は、前半は「離岸～屋久島付近での変動」、後半は「屋久島付近での変動」で経過する。

・九州西方における対馬暖流水の分布は、「東偏型」で経過する。

(2)表層水温

前半には、山口県沿岸・沖合と五島西沖、五島灘、天草西沖、沖縄島周辺海域では「平年並み」、対馬東水道と壱岐水道、大陸棚上では「やや高め」、西薩・甑沖と薩南沿岸、黒潮域では「平年並み～やや高め」で経過する。

後半には、山口県沿岸・沖合と対馬東水道、五島灘、五島西沖では「やや高め」、壱岐水道と天草西沖、西薩・甑沖、薩南沿岸、黒潮域、沖縄島周辺海域、大陸棚上では「平年並み」で経過する。

2. 経過(2001年10月～2002年2月)

1. 大陸棚上

(1)水系

中国大陸沿岸水は10・12・2月は「西偏」、11・1月は「東偏」で経過。

(2)水温

10～12月 北部、南部とも「平年並み」。

1月 北部、南部とも「やや低め」。

2月 北部、南部とも「平年並み」。

2. 黒潮流域

(1)海流・水系

沖縄北西方の黒潮の流路は、秋季は「平年並み」、流量は秋季には「やや多め」、冬季には「はなはだ多め」で経過。

薩南海域における黒潮北縁域は、10月上旬に「離岸」、10月下旬には「接岸」した。11～1月中旬は「離接岸」をくり返した。1月下旬には「離岸」したが2月中旬以降は「屋久島付近での変動」で経過。

(2)水温

10月：「平年並み」。

11月：「やや高め」。

12・1月：「平年並み」

2月：「やや高め」

3. 対馬暖流域・沿岸域

(1)海流・水系

対馬暖流水の分布位置は、10・11月は「西偏」、12・1月は「東偏」、2月は「西偏」で経過。

(2)表層水温

山口県沿岸・沖合：10月は「平年並み」、11月は「やや～かなり高め」、12月は「はなはだ高め」、1月は「平年並み～やや高め」。

対馬東水道：10月は「平年並み」、11月は「やや高め」、12～2月は「平年並み」。

壱岐水道：11・2月は「平年並み」。

五島西沖：11・2月は「やや高め」。

五島灘：11月は「やや高め」、2月は「平年並み」。

天草西沖：11月は「やや高め」。

西薩 甕沖、薩南沿岸・沖合：11月は「平年並み」。

沖縄島南東：10月は「かなり高め」、11月は「平年並み」。

(3)表層塩分

山口県沿岸・沖合：10・11月は「平年並み」、12月は「やや～かなり低め」、1月は「平年並み」。

対馬東水道：10月は「平年並み」、11月は「やや低め」、12月は「平年並み」、1・2月は「やや低め」。

壱岐水道、五島西沖、五島灘：11・2月は「平年並み」。

天草西沖：11月は「やや低め」。

西薩 甕沖、薩南沿岸・沖合：11月は「平年並み」。

沖縄島南東：10・11月は「やや低め」。

3.現況（2002年3月）

(1)大陸棚上

中国大陸沿岸水は「西偏」。表層水温は北部では「平年並み」、南部では「やや高め」。

(2)黒潮流域

薩南海域の黒潮北縁域は「屋久島付近での変動」。表層水温は「やや高め」。

(3)対馬暖流・沿岸域

対馬暖流水は「西偏」。

表層水温は、山口県沿岸・沖合と対馬東水道、壱岐水道、五島西沖・五島灘では「やや高め」、天草西沖、西薩 甕沖、薩南沿岸・沖合では「平年並み」。

表層塩分は山口県沿岸・沖合、対馬東水道、壱岐水道では「やや～かなり低め」、五島西沖・五島灘、天草西沖、西薩 甕沖、薩南沿岸・沖合では「平年並み」。

（註）引用符「」で囲んで表した平年比較の水温・塩分の高低の程度は以下のとおり

「はなはだ」：約22年に1回程度の出現確率

「かなり」：約7年に1回程度の出現確率

「やや」：約3年に1回程度の出現確率

「平年並み」：約2年に1回程度の出現確率

「東シナ海～日本海西南域における漁況の見通し」

1. 今後の見通し(2002年4月～9月)

(1) マアジ

- ・体長15～25cmの1歳魚(2001年級群、ゼンゴ・小銘柄)が主に、体長5～15cmの0歳魚(2002年級群、豆・ゼンゴ銘柄)と体長25cm以上の2歳魚以上(2000年級群他、中・大銘柄)も漁獲されよう。
- ・来遊資源量は前年を下回るだろう。
- ・沖合域の漁況は前年を下回り、沿岸域の漁況は、北部海域(山口県～佐賀県)では前年並み、南部海域(長崎県～鹿児島県)では前年・平年を下回るだろう。

(2) マサバ

- ・体長15～30cmの0・1歳魚(2002・2001年級群、豆・小銘柄)が主に漁獲されよう。
- ・来遊資源量は、低水準であった前年並みだろう。
- ・沖合域の漁況は低調であった前年並みで、沿岸域の漁況は前年並みで平年を下回るだろう。

(3) ゴマサバ

- ・体長15～33cmの0・1歳魚(2002・2001年級群、豆・小銘柄)が主に漁獲されよう。
- ・来遊資源量は前年を下回るだろう。
- ・沖合域の漁況は前年並みで、沿岸域の漁況は前年・平年を下回るだろう。

(4) マイワシ

- ・体長3～12cmの0歳魚(2002年級群、カエリ・小羽銘柄)が主に漁獲されよう。
- ・来遊資源量は低水準だった前年並みで、平年を下回るだろう。

(5) ウルメイワシ

- ・体長5～15cmの0歳魚(2002年級群、小羽銘柄)を主体に、18～20cmの1歳魚(2001年級群、中羽銘柄)が漁獲されよう。
- ・来遊資源量は前年並みで、平年を下回るだろう。

(6) カタクチイワシ

- ・前半は体長3～5cm(カエリ銘柄)、後半は5～8cm(小羽銘柄)の0歳魚(2002年春季発生群)を主体に漁獲されよう。
- ・来遊資源量は前年・平年を下回るだろう。

注：体長は、マアジ、マサバ、ゴマサバは尾叉長を、マイワシ、ウルメイワシ、カタクチイワシは被鱗体長を意味する。「前年」は2001年4月～9月。

「平年」は過去5年の平均値。

2. 漁況の経過(2001年10月～2002年1月)と資源状態

◎東シナ海～日本海西南域における漁況の経過

2001年10月～2002年1月の大中型まき網漁業の漁場は、対馬沖、五島西沖および東シナ海中・南部が中心であった。この間の、大中型まき網漁船の九州主要港への水揚量は、全魚種合計10万3千トンで前年(2000年10月～2001年1月)の4万9千トンを上回った。マアジは6千7百トンと前年(5千7百トン)を上回り、さば類は6万3千トンで前年(2万2千トン)を上回っ

た。

山口県～鹿児島県地先における沿岸漁業の漁況は、表1のような経過であった。マアジの漁況は、山口県で0歳魚が前年を上回ったものの、全体的には前年を下回った。漁獲の主体は、体長15～23cmの1歳魚（2000年級群）と体長15cm以下の0歳魚（2001年級群）であった。マサバは、海域による差はあるが、全体的には前年を下回った。漁獲の主体は体長30cm以下の0・1歳魚であった。ゴマサバは、漁期前半に中・大銘柄が好調だったが、後半は低調で全体的には前年を下回った。漁獲の主体は、体長15～30cmの0歳魚であった。マイワシは低調に推移した。漁獲の主体は、体長16cm以下の0歳魚であった。ウルメイワシは前年を上回った。漁獲の主体は、体長20cm以下の0歳魚であった。カタクチイワシは前年を下回った。漁獲の主体は、体長3～7cmの0歳魚（2001年秋季発生群）であった。

1．マアジ対馬暖流系群

対馬暖流域（東シナ海、九州北・西岸域、日本海）に生息するマアジの資源量は、1970年代後半に低水準にあったが、1980～1990年代前半に増加し、1992～1998年には高水準を維持した。1998～2000年の加入量が減少したため、資源は減少傾向を示している。それに伴って、対馬暖流域におけるマアジ漁獲量は、1980～1990年代は増加傾向を示し、1993～1998年には約20万トンを維持したが、1999年は14万トン、2000年は15万トンと減少した。

例年、4～9月期には1歳魚（ゼンゴ・小銘柄）が漁獲の主体で、漁期後半には0歳魚（豆・ゼンゴ銘柄）も漁獲される。2001年級群は、2001年夏季に日本海西部で多獲されたが、その後の漁況から見て今後（2002年4月～9月）1歳魚としての来遊量は、2000年級群の1歳魚時の来遊量より少ないと推定される。2000年級群は1999年級群より豊度が高いと考えられる。

2．マサバ対馬暖流系群

対馬暖流に生息するマサバの資源量は、1977～1990年に変動しながら減少を続けた。1991～1996年には資源量は増加傾向にあったが、1997年から減少傾向に転じた。対馬暖流域におけるマサバの漁獲量は、1970年代後半には45～58万トンであったがその後減少し、1980年代後半は30万トン近くを維持したものの1990～1992年には13～15万トンと大きく落ち込んだ。1993年以降漁獲量は増加傾向を示し、1996年には40万トンに達したが、1997年は21万トンに大きく減少し、1999年は11万トン、2000年は8万トンと減少傾向は続いている。

来期の漁獲の主体と考えられるのは、春以降に加入する0歳魚と前年生まれの1歳魚である。2001年級群は2000年級群よりも豊度の高い年級群であると推定される。

3．ゴマサバ東シナ海系群

東シナ海から日本海西部に分布するゴマサバの資源量は、変動しながらも1980年代から1990年代半ばに同程度の水準にあった。1997～1999年には増加傾向を示したが、2000年は大きく減少した。

例年、4～9月の漁獲の対象となるのは春以降に加入する当歳魚と前年生まれの1歳魚である。漁期前半は2001年級群（豆・小銘柄）、漁期後半には2002年級群（豆銘柄）主体になると推定さ

れる。2000年級群、2001年級群はいずれも豊度が低いと考えられる。

4. マイワシ対馬暖流系群

近年の対馬暖流域におけるマイワシの漁獲量は、1988年に最大となり、1991年まで100万トン以上を維持してきたものの、それ以後は漁獲量が年々減少している。2000年以後の対馬暖流域での漁獲量は1万トンを下回っている。1999年に0歳魚を主体に漁況が一時上向いたものの、2000年級群および2001年級群は極めて小さい。2002年級群も大きな年級群が出現する可能性は低い。近年の4月から9月には、0歳魚主体に漁獲されている。

5. ウルメイワシ対馬暖流系群

対馬暖流域における近年のウルメイワシの漁獲量は1993年に最大となった後に減少した。2000年の漁獲量は近年で最低となったが、2001年の漁獲量は2000年を上回った。2000年夏季に行われた計量魚探調査でもウルメイワシの現存量指標値は前年を大きく上回った。これは、2001年級群が多く発生したからであろう。2002年級群はこれから加入してくるが、2001年級群が産卵親魚として一部参加するので、近年減少気味であった産卵親魚量が増加している可能性がある。資源量が前年を上回るかどうかは、2002年級群の加入により影響されるだろうが、現時点では不明である。例年4月から9月には0歳魚主体に漁獲されている。

6. カタクチイワシ対馬暖流系群

近年の対馬暖流域におけるカタクチイワシの漁獲量は1997年を除いて高水準にある。当該海域地先では、カエリ(体長3~5cm)と小羽(5~7cm)銘柄を主体に漁獲しており、発生群の大きさが漁況に影響する。卵豊度からみると2001年春季発生群は2000年春季発生群よりも低いものの、2001年夏季までは順調に漁獲されていた。また2001年夏季に行われた計量魚探調査でも高水準と判断されたが、2001年秋季以降の漁獲量は多くなく、2001年秋季発生群の加入量が少なかったと考えられる。今後は、2002年春季発生群の大きさによって漁況は変わると思われるが、産卵親魚の漁獲量などからみて期待できない。例年4月から9月にはカエリ・小羽を主体に漁獲されている。

表1. 沿岸域の漁況経過(2001年10月~2002年1月)

	マアジ	マサバ	ゴマサバ
山口	中型まき網での水揚げは前年比106%と前年並みで平年比80%と低調に推移した。棒受、すくい網では、マアジ当歳魚(ゼンゴ)が9~11月まで水揚げされ前年比308%、平年比198%であった。	中型まき網では前年比449%、平年比127%であった。棒受・すくい網ではギリサバが9割を占めて前年比615%、平年比307%と好調であった。	
福岡	平年に比べ著しく低い。	9月一時的に大量に漁獲された後、平年に比べ著しく低い。	
佐賀	前年同期、平年同期をやや下回った。	前年同期を大きく上回り、平年同期を上回った。	
長崎	前年・平年を下回った。	前年を上回ったが、平年を下回った。	

熊本 牛深港	水揚量が 72.2 t で平年比 13%、前年比 14% と減少した。主体の銘柄は芝であった。	水揚量は 204.1 t で平年比 33%、前年比 34% であった。銘柄は中で、ゴマサバも 68.1 t の漁獲があった。	
鹿児島	10月以降、アジ仔・豆アジ(2001年級群)主体に、低調だった前年並みで推移した。10～1月合計865トンの水揚げで、前年比77%、平年比29%。		11、12月は中・大ゴマサバ主体に低調だった前年を上回った。10、1月は100トン未満と低調。10～1月合計1,258トンの水揚げで、前年比60%、平年比31%。

	マイワシ	ウルメイワシ	カタクチイワシ
山口	棒受、すくい網で、ヒラゴ主体で前年比65%、平年比7%と引き続き漁獲量は少ない。	9月に大銘柄に混じって中小銘柄が水揚げされた。前年比605%、平年比108%と平年並みであった。	シラス銘柄が8割を占めた。前年比62%前年比35%と低調であった。
福岡	低調である。	ほとんど漁獲されていない。	秋季発生群の漁獲は平年の6割程度で回復の兆しが見られた。
佐賀	前年同期同様、漁獲されなかった。	前年同期同様、ほとんど漁獲されなかった。	前年同期を大きく上回り、平年同期を下回った。
長崎	低調に推移した。	前年・平年を上回った。	前年・平年を下回った。
熊本 牛深港	水揚量は 0.47 t で平年比 10%、前年比 5% であった。	水揚量は、798.2 t で平年比 598%、前年比 412% であった。銘柄はウルメが中心で、大も漁獲された。	水揚量は、8.7 t で平年比 0.9%、前年比 0.4% と漁獲が激減した。銘柄はタレであった。9月以降漁獲が著しく減少している。
鹿児島	10月以降ほとんど水揚げはなく、10～1月合計0.9トンの水揚げで、前年比11%、平年比0%。	中羽ウルメ(2001年級群)主体に616トンの水揚げで、前年比997%、平年比37%。	10月以降、まき網では全く水揚げはなく、前年比0%、平年比0%。

注：「平年」は過去5年の平均値。